

もうひとつの「白い山信仰」

奥美濃スキー王国と白鳥のスキー場



日本におけるスキーの歴史は、明治44年(1911)に交換将校として来日した当時のオーストリア・ハンガリー帝国の軍人、テオドール・エドラー・フォン・レルヒ少佐が日本で初めてスキーの指導を行ったことに始まるとされています。

白山連峰の麓にある郡上市白鳥町は、冬季は多くの雪に閉ざされ、わら細工や莚織りなどの日暮らしで収入も少なかったと言われます。

白鳥町の人たちは、その雪を活かした冬の観光産業として早くからスキーに着目し、大正時代初期には青年たちをスキー発祥の地である新潟県上越市高田へ派遣するなど、奥美濃の地にスキー場を開設するべく準備を進めていきました。

その後、昭和5年(1930)の城山スキー場の開設を皮切りに、白鳥町内の各地で地域の人たちの手によりいくつものスキー場が開かれ、昭和20年代後半頃にスキーが大衆スポーツとして急速なブームとなると、白い雪山を求めて各地から多くのスキーヤーたちが白鳥を訪れるようになります。

それはあたかも、いにしへの白山登拝における「上り千人、下り千人」ともいえる賑わいでありました。

また、スキー場は地元にとっても、住民の冬の雇用の場となるとともに、スキー客相手の民宿による副収入をもたらしました。

昭和40年には民宿の数は270戸を数え、年間収入は約1億2千万にも達したと言われ、これまでの「雪は憂きもの」と思っていた人々の考えを一新させるとともに、民家の生活様式や家屋の構造にも大きな変化をもたらしています。

やがて時代の流れとともに、スキー場にはリフトや降雪機、レストハウスなどの設備や施設の充実が求められ、地元経営の小中規模のスキー場の入込数では維持運営が難しくなり、多くのスキー場が閉鎖されるに至りました。

今回は、そんな白鳥町におけるスキー場のあゆみを振り返りご紹介します。